

遠のく平和を、あきらめずに追い求めよう

石井摩耶子 (会員・恵泉女学園大学名誉教授)

大田区民の私の喜びは、ジョギングをする公園の広場で母子像を見、プレートに記された32年前の8月15日制定の「大田区平和都市宣言」を読むことだ。「平和ってなあに」で始まる詩は、人々が笑顔で自由に楽しく暮らせることだと謳い、「大田区は平和憲法を擁護し、核兵器のない平和都市であることを宣言する」と結んでいる。しかし、今の日本と世界は、その平和からどんどん遠のいている。その原因と解決への道筋を考えたい。

爆破事件の連鎖の中で

今、世界各地で毎日のように自爆攻撃や爆破事件が起きている。その直接の要因は、2001年の9・11「同時多発テロ」事件に直面したブッシュ米大統領が「テロとの戦争」を宣言したことにある。「見えない敵」の根拠地だとアフガニスタンに空爆を行い、さらに「有志連合軍」を組織し、国連決議もなしにイラクに戦争をしかけ、フセイン大統領を倒し、9年間も駐留した。イラクは内戦状態に陥り、大量の難民が周辺国に流出し、国外からアメリカに反発する多様な武装集団が集まり、その中で登場したのがイスラム国(I S)である。I Sの目的は、百年前の第一次世界大戦に英仏側に参戦し、勝利と共に実現するはずだった「カリフ国家」の樹立にある。それを阻んだのが悪名高い英仏の「サイクス・ピコ秘密協定」であり、今のシリアやイラクなどの国境線はこの協定で引かれ、アラブ地域は帝国主義列強の実質的な分割支配下に置かれた。だからI Sは、シリアとイラクの国境を跨ぐ地域を制圧し、「イスラム国樹立宣言」をしたのだ。石油密売や身代金などで資金力を誇り、世界各地の若者を引きつけ、勢力を拡大中だ。一方、米国主導の有志連合軍の空爆によるI S掃討作戦はI Sと無関係の多数の住民の死傷者を出している。また同じく歴史に翻弄され「国を持たない最大の少数民族」クルド人の武装組織も、悲願の独立を賭して、I Sへの攻撃を行っている。

分断の「壁」を求める人々

10年前にパレスチナYWCAを訪れ、職員のリナさんの案内でラマラの難民キャンプの見学をした。その時、イスラエルが築いた分断壁にあ

る検問所を通り、動物扱いされた体験を忘れられない。ラナさんは通勤のため毎日その検問所を通らねばならない。「壁」が人々のごく普通の生活を奪い、苦痛を強いていることが痛いほど分かった。ところがいまアメリカでは、「メキシコとの国境に壁を築く」と叫ぶ共和党大統領候補トランプ氏を多くの貧しいアメリカ人が熱狂的に支持している。トランプ氏が選挙に敗れても、こうした人々の思いは解消しないだろう。格差社会の現実こそ問題なのだ。イギリスが国民投票でEUから脱退することも、流入する外国人に職を奪われる不安を持つ多数の貧しい人々の声が反映したといえよう。分断化する社会で、日々の生活に追われる貧しい人々の不安を解消するために、各国がセイフティ・ネットの充実を図らぬ限り、世界の未来は暗い。

### 私たちはいま何を？

米・仏のように、最新兵器を総動員して空爆を繰り返し、国内で戒厳令を発しても、自爆攻撃に走る若者たちを封じ込めことは無理だということ、一人でも多くの人々と共に確認することがまず第一である。第二には、ISの指導者も一目置くイスラム教の宗教的指導者や、紛争解決を対話によって実現しようとする国際NGOの力を総動員して当事者間の話し合いの場を作り、世界的な世論を盛り上げていくこと。その際大事なことは、当事者同士の紛争解決の努力に水を差す外部勢力の介入を極力阻止することだ。特に日本を含む経済大国の軍産複合体の利益追求のための武器供給を止めさせる必要がある。そして第三に、従来のアラブの人々の親日感情を逆撫でする今の安倍政権の軍事依存・アメリカ追随外交に「ノー」と言うこと。企業の兵器売込みを監視すること。日常的には、在日のアラブ人やイスラム教徒からお話を聞くことや問題企業の商品不買運動など、できることから始めたい。私たちは聖書によって、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むこと・希望は私たちを欺かないことを知っている。遠のく平和を、あきらめずに追い求めよう。